



最近3D、すなわち立体映像の映画などが大変な評判だと聞く。立体映像といえは古くは赤と青の眼鏡を使った記憶があり、また25年前、つくば科学博で大画面の迫力に感動した思い出もある。

21世紀の3Dはさら

に進化してデジタル化された映像を専用のプロジェクターで、専用の特殊なスクリーンに投射し、これを専用の眼鏡で見るのだそうである。3D—立体的視



草野 義輔

事の段取りは平面に書かれている。これを立体的に把握することができれば事柄の隅の方まで、さらには裏側まで想定して見ることができ結果、目配りの利いた仕事につながるのではないかと。古来、行間を読むとか眼光紙背に徹すといった言葉があるが、これらも物事を立体的に見ることの大切さを指していると思う。

最近流行のKY
(空気を読めない)

という言葉も平面的な見方から視野が狭くなっていることに起因していると考え

随分と手間がかかっている。立体視の原理は変わらないが新作はぜひ一度見てみたいものだ。

立体といえは、このごろ仕事を立体的視点で見ることができるといふことが気になってくる。通常マニュアルやシナリオなど仕

る。この立体的視点は平素からの心構えで随分と訓練されていくのではないかと思う。多くの人がこの立体的視点で仕事や世間を見ていけば随分と住みやすい世の中になるような気がするのだが。

(昭和学園高校理事長・日田市)